

Faculty Development

山梨大学教育人間科学部

第28号

March.30.2011

INVITATION



教育人間科学部初任者研修会
(4月7日)

教育人間科学部FDフォーラム
(2010年1月19日)

第16回FDフォーラム【京都】
(2011年3月5日～6日)

2010年度 第16回FDフォーラム (於・京都外国語大学) に参加して

3月5・6日の2日間、京都外国語大学で行われた「2010年度第16回FDフォーラム」に参加してきました。「FDフォーラム」は、財団法人大学コンソーシアム京都が主催しており、毎回全国から多くの参加者があります。

第1日目は、今回の統一テーマ「組織的FDの取り組み ～FD義務化から現在(いま)～」によるシンポジウム(全体会)。パネリストは、平山弓月(京都外国語大学教授)、木野 茂(立命館大学教授)、山田剛史(島根大学准教授)、池田輝政(名城大学副学長・理事)の諸氏、コーディネーターは高橋伸一氏(京都精華大学教授)でした。

第2日目は、第6分科会「芸術系領域における組織的FD「連携」－音楽系FDと美術系FD－」に参加。音楽、美術、映像系の大学における実践事例が発表されました。東京音大教授・武石みどり氏からは、FDの一環として行っているアウトリーチ

活動を音大3校による共同プロジェクトに発展させた「大学間連携」の事例を、東北芸術工科大教授・白杉悦雄氏からは、美術系大学における初年次教育に「土を耕す」農芸クラスを導入した経緯や意義と、それに全教員を参加させた「大学内連携」の事例が報告されました。さらに立命館大学准教授・富田美香氏からは、新設の映像学部の映画実習において、制作を通して地域に入り込み、人を観察し、深くつきあい、生活や社会を学ぶ「社会連携」の重要性を話されました。これらの報告や協議を通して、芸術創造や発信には人と人との結びつきが重要であり、その開発を各々の専門教育カリキュラムの中に如何に取り込むかという視点を持つことと、それを大学全体として組織的に支援していくことの重要性を再認識させられました。

教育人間科学部FD委員会副委員長
藤原 嘉文

2010 年度教育人間科学部FDフォーラム

教育人間科学部・教育学研究科合同のFDフォーラムを、下記の内容で実施しました。

今年度のテーマは「学生・院生の主体的学びを考える」。

今年度スタートした教職大学院で取り組まれている「1枚ポートフォリオ」を中心にした、大学院教育における「学びの履歴」に関する取り組みと、教育ボランティアの活性化に向けて取り組みを開始した学生ボランティア委員会の活動に関する報告を基に、学生・院生の主体的な学びを大学・大学院教育の中にどう位置づけるか、参加者の間で活発な討論が展開されました。

2010年度 山梨大学教育人間科学部・大学院教育学研究科合同FDフォーラム

テーマ：学生・院生の主体的学びを考える

報告1 教職大学院におけるポートフォリオの取り組みに考える

報告2 教育ボランティア・学生ボランティア委員会の取り組みに考える

日時：平成23年1月19日(水)

場所：教育実践総合センター多目的室

今年度からスタートした教職大学院では、毎回の授業や実習の経験を「ポートフォリオ」で振り返る取り組みを行っています。フォーラムでは、まず院生の鈴木和幸さん・深澤隆仁さんから「全ての授業で使う1枚ポートフォリオ」の活用例や、課題研究で実習の取り組みを記録した「ポートフォリオ」の実践等について報告がありました。

報告の中で鈴木さんは、教職大学院で使われている3種類のポートフォリオのいずれもが、「既有知識の確認」「授業・実習で学んだことの確認

「質問・疑問の明示化」に有効であると同時に、それに対する「教員のコメント」を通して、「新しい視点・違った見方への気づき」が醸成される点を、この取り組みの優れた内容だと語っていました。

毎回の授業や実習で、「ポートフォリオ」を書き、教員がそれにコメントを記入していく実践は、院生・教員双方にとって「負担」の多い取り組みですが、こうした努力を抜きにしたところで、学びの質は高まらないという点が強調されていました。



FDフォーラムでポートフォリオの取り組みを報告

現代学校論学習履歴 氏名 _____

【「学校」という言葉を挙げて、文を三つ挙げて下さい。三つ以上書いても構いません。】

受講前 _____

日	今日の授業の中で、一番大切だったことを書いてください。	受講後の振り返り、気づきを書いてください。
1		
2		
3		
4		
5		
6		
7		
8		
9		
10		
11		
12		
13		
14		
15		
16		
17		
18		
19		
20		
21		
22		
23		
24		
25		
26		
27		
28		
29		
30		

受講後 _____

【「学校」という言葉を挙げて、文を三つ挙げて下さい。三つ以上書いても構いません。】

本講義やその授業を通して、何かがよく理解できました。そのことについて、あなた自身のように思っていますか。考えたこと、感じたこと、何でも構いませんから自由に書いてください。

ポートフォリオのサンプル

FDフォーラム：学生・院生の主体的学びを考える

またこれに続いて、発達教育コース3年生の古屋卓さんから、「教育ボランティア活動における学生ボランティア委員会の取り組みに考える」というテーマで、今年度から活動を開始した教育ボランティア学生委員会の活動について報告してもらいました。

教育人間科学部における教育ボランティア活動は、たとえば今年度に関していえば、延べ362名の学生が、県内62箇所の学校や教育機関で活動していることに現れているように、多くの学生が、自ら学びの場を求めて活動を展開している現実があります。

とかく受動的で、言われたことしかしないと批判されることの多い学生たちが、こうしてボランティアとして積極的に社会と関わっている姿に、期待と可能性を感じないではられません。今年はそれをさらに一歩進めて、教育ボランティア活動の企画・運営に参加・参画してもらおうと、学生ボランティア委員会を立ち上げたわけです。

報告の中では、ボランティアガイダンスの司会をした経験、ボランティア交流会の企画・宣伝・運営に取り組んだ経験、そしてさらに現在進めているボランティアガイダンスブックの企画・編集作業について語られました。呼びか

けても「交流会」に学生がなかなか参加してくれない現実や、学生委員会を引き継いでくれる学生を見つけることの困難さを、具体的に語ってくれました。

報告を受けた討論の中では、授業を主体的に振り返る手段として、ポートフォリオの有効性が、いったいどこまで汎用性を持ちうるかといった問題が語られたり、教育ボランティア学生委員会の活動を活性化させるためのアイデア等が具体的に出されたりしました。フォーラムを終えた後の感想の中に、「初めはいやだったが、やってみたらやりがいがあったということはよくあることで、最初は少し強制的に参加させることも必要かも」しれないといった意見も寄せられました。

比較的少人数の教育として取り組まれている大学院のポートフォリオ実践を、50人を超え、100人を超える授業の中で、どのように応用できるかという問題も出されましたが、いずれにしても、多様な形で授業の双方向性を工夫し、学生・院生の主体的な学びを支え・組織していく努力が、今の大学・大学院に求められているという点で意見は一致しました。



学生委員会主催「ボランティア報告会」の様子



FDフォーラムで学生委員会の活動を報告

この授業では、保育に関する理論的な学習はもちろんですが、学生たちが乳幼児に「共感する経験」を通して、乳幼児とのかかわり方を「実感として学ぶ」ことをもう一つの目的としています。家庭科での保育学習が「実践的・体験的な学習」を重視していること、また乳幼児と日常的にかかわる経験をもつ学生が少数であることなどから、知識として保育について理解するだけではなく、乳幼児を「実感として知る」ということも重要であると考えからです。そこで今年度は以下のような内容を取り入れてみました。また、経験しただけで終わらないよう、テーマごとに講義→実習→振り返りという流れで行いました。

- ①友達と遊ぶ幼児の様子や、ものを使って遊ぶ乳児の様子をビデオを視聴し、乳幼児の思いを理解したり、共感したりする。
- ②離乳食作り、人形を使っての沐浴、また、市販のおもちゃの検討と手作りおもちゃの製作を行い、乳幼児への大人のかかわり方を考える。
- ③附属幼稚園で幼児と実際にふれあい、自分自身のかかわり方を考えながら実践する。

今回授業を行って見て、乳幼児を共感的に理解することについては②③である程度の成果が見られました。例えば②の沐浴実習では、実習用の人形を用い沐浴を行いました。自分たちで人形に名前をつけ、名前を呼びかけ、「気持ちいいね」などと話しかけながら丁寧にお風呂にいれ、水が顔にかかると「あつごめんね」「大丈夫？」などと声をかけるなど、人形に対しても共感的なかかわりをもとうとする姿がみられました。さらに、③幼稚園での幼児との触れ合いでは、幼児が何を望んでいるのか、どのようなかかわりがふさわしいのかを考えながら幼児と遊ぶ中で、楽しさと同時に幼児とかかわることの難しさを実感したようです。

一方、①のビデオ視聴では、共感しようとするよりも、乳幼児の姿を対象化してとらえようとしており、分析的な視点で理解しようとしていることが分かりました。乳幼児を理解する際、どちらも重要な視点ですが、人形であるか、生身の人間であるかということよりも、学生がどのようなスタンスで対象にかかわるかということが、学習の効果にかかわってくるということを改めて実感しました。

家庭科の授業では必ずしも実際の乳幼児とかかわる経験を十分にとれるとは限りません。そういう場合の教材のあり方についても、経験してみる中で、学生自身考えることができたようです。しかしながら、人形などの場合は、対象からの反応があるわけではないので、本当の意味での「共感的理解」ではありません。次年度は、実際の乳幼児と保護者のかかわりを観察したり、実際にかかわったりできるような機会を設け、乳幼児と大人とのかかわりをより実感として学べるような授業を考えていきたいと思っています。

保育学（実習および家庭看護を含む。）の授業の感想

家政教育専修3年 五味 奈央子

保育学の授業は講義で学んだことを次回で実践するという流れで行われました。保育学での実践では様々な内容に取り組みましたが、どれも学生が楽しく主体的に学ぶことができるものでした。授業内に学んだことを実践する時間が設けられていたことで、知識だけでなく経験としても学習内容が身に付き、より深い学習ができたと感じます。講義だけでは幼児とのかかわり方を実感としてとらえることは難しかったのではないかと思います。またビデオ視聴や附属幼稚園訪問では講義だけでは見えてこない幼児の実態を知ることができました。実際の幼児の生活する姿は私たちの想像と異なっている部分もあり、ビデオをもとに検証したり、保育現場で実際に幼児とかかわれたことでより正確な幼児の認識へと結びついたと思います。保育学の授業を通して行った様々な実践を今後の学習に活かしていきたいと思っています



授業風景